

弥三郎ばあさん

(新潟)

弥彦山やひこやまのふもとに、弥三郎という網あみ使いがいました。毎日、たんぼで網を使って鳥をとつてくらしていました。弥三郎には年とつたばあさんがおりました。

ある日のこと、いつものように網を使っていると、山からおおかみが四匹ひきおりてきました。弥三郎は恐ろしくて逃げだしましたが、おおかみはあとを追いかけてきます。すると、大きな松まつの木があつたので、木の上によじ登りました。おおかみは、

「いくら木の上に逃げても逃がすものか」といって、おおかみつなぎを始めました。おおかみたちは、つぎつぎに肩車かたぐるまして登ってきます。いまにも弥三郎の足にとどきそうです。ところが、いちばん下のおおかみがふんばりきれず、おおかみたちはどたんと重なりあつたおれてしまいました。何べんやってもだめです。おおかみつなぎがうまくいきません。すると、いっぴきのおおかみが、

「弥三郎ばあさんをよぼう」といって、かけだしていきました。弥三郎が、

「弥三郎ばあさんといったら、うちのばあさんだが。はて、ふしぎだな」と思っていると、はるか西のほうから大きな黒雲がごんごんと近づいてきました。真黒な雲は弥三郎をつつみました。

「これはたいへんだ」

そのとき、いきなり黒雲の中から大きな手がぬつと出て、弥三郎の首筋くびすじをつかまえました。弥三郎は、もう無我夢中むがむちゅうでその手をつかみ、腰こしにさしていた鉋なたをとって、力まかせにぶった切りました。血がだらだら木の下に流れおちました。これを見て、おおかみたちは、

「これはかなわん、かなわん」といって、逃げていってしまいました。

やがて、黒雲がきえたので、弥三郎は切りおとした腕うでを持って家に帰りました。腕には針金はりかねのような毛がいっぱい生えていました。

「ばあさん、いま帰った。きようは鬼おにの腕をとってきたよ」

ばあさんは、奥おくの部屋でうんうんうなつて寝ていましたが、

「どれどれ、はようその腕を持ってきて見せてくれ」といいました。

弥三郎が、奥へ行ってばあさんに腕を見せると、ばあさんは、たちまち鬼婆おにばばのすがたになつて、いきなりその腕を取り、

「これはおれの腕だ」といいながら、自分の腕の傷口にくっつけて逃げていってしまいました。

弥三郎は、あっけにとられて見ていましたが、やがて、ばあさんの寝ていた部屋の床をめぐってみると、鳥やけものや人間の骨がつみ重なてありました。鬼婆が弥三郎のばあさんを食って、ばあさんに化けていたのだということです。

おしまい

原話…『加無波良夜譚』文野白駒編／三元社

再話…村上郁

